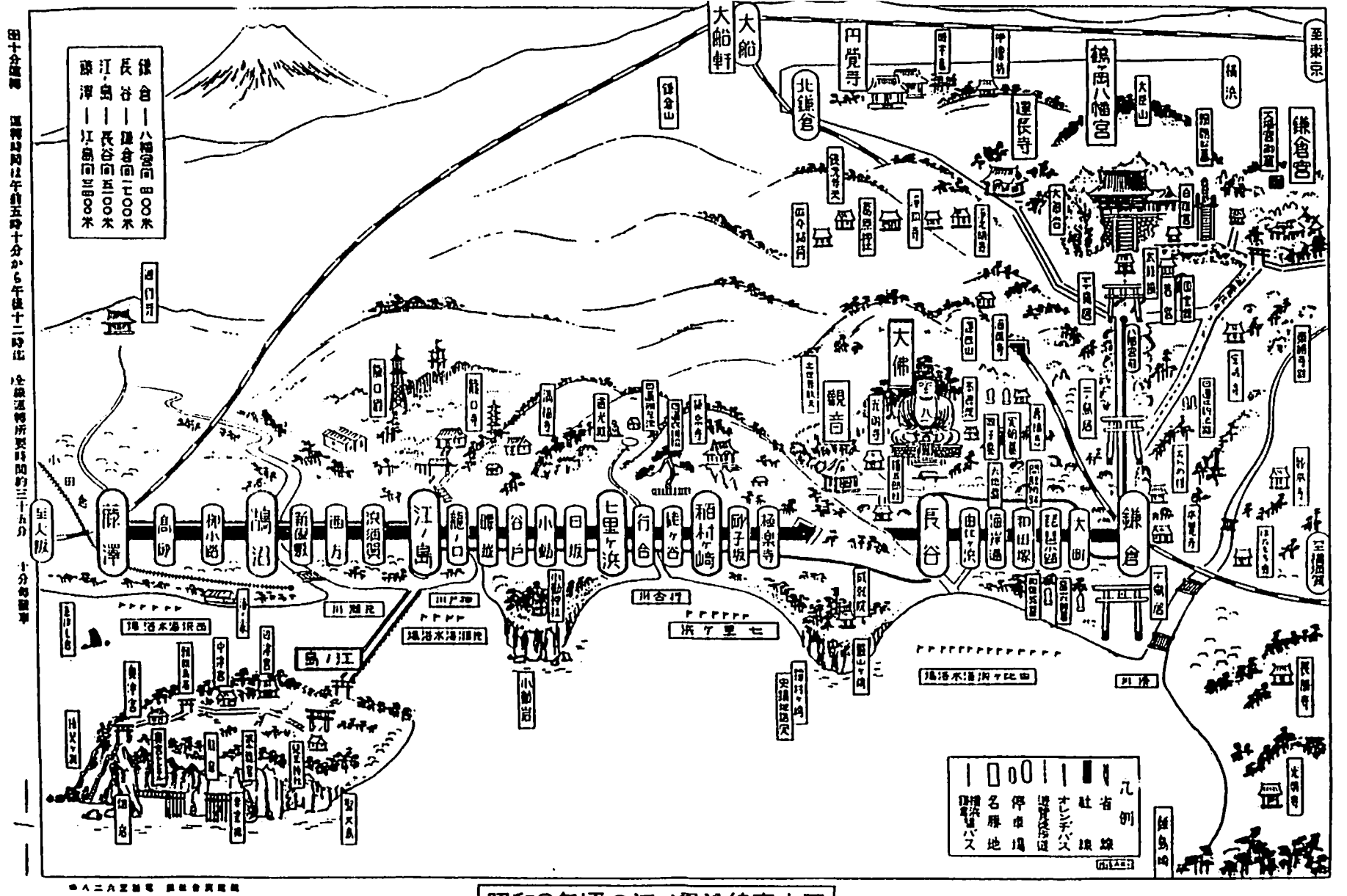
平成元年十月二二日（日）郷土研究会

第一七〇回　史跡めぐり資料

おとなの遠足・江ノ島、西鎌倉へ

越谷市郷土研究会




昭和8年頃の江ノ電沿線案内図

☆第一七〇回　史跡めぐり　ご案内

おとなの遠足・江ノ島、西鎌倉へ

とき　平成元年十月二二日（日）

集合　南越谷駅前　午前八時一五分

午前八時三一分

コース　南越谷駅ー（武蔵野線）ー南浦和駅ー（京浜東北線）ー東京駅ー（東海道線）ー藤沢駅ー（江ノ電）ー江ノ島駅＝「弁天さま」江ノ島神社＝「日蓮法難」龍口寺＝江ノ島駅ー（江ノ電）ー腰越駅＝「義経腰越状」満福寺＝腰越駅ー（江ノ電）ー稲村ケ崎駅＝「新田義貞・太刀投げ」稲村ケ崎・「真白き富士の嶺」七里ケ浜＝稲村ケ崎駅ー（江ノ電）ー鎌倉駅ー（横須賀線）ー大船駅ー（東海道線）ー東京駅ー（京浜東北線）ー南浦和駅ー（武蔵野線）ー南浦和駅

参加費　四、〇〇〇円

案内者　宮川　進

車窓　つれづれなるままに

○沿線鉄道唱歌は２０ページにあります。

○むかしの東海道は品川駅から大井町駅（通過）間は東海道線の左側を、大森駅（通過）あたりは右側を通っていたらしい。

○大井町駅（通過）と大森駅（通過）との間に、モースが発見し、日本の考古学の第一歩となった大森貝塚がある。右側に、品川区の「大森貝塚」の立て看板と、大田区の「大森貝塚」の碑があるのにご注意。

○多摩川の鉄橋をわたると、川崎市。渡ってすぐ、右側のリクルートの大きなビルが例の大疑獄摘発の端緒となったもの。

○鶴見駅（通過）のあたり、右側の山の上にみえる大きな寺が、曹洞宗の、永平寺とならぶ大本山・総持寺です。

○江ノ電・鵠沼駅付近は、いわゆる湘南・鵠沼の高級別荘、住宅地域です。

○江ノ電・腰越駅から稲村ケ崎駅の間は、右側にご注意。七里ケ浜の海岸がみえます。志賀直哉や吳与善郎なども、このあたりで、海を眺めたとのことです。

○お土産には、江ノ島・駅から島までの右側、玉屋の羊、羹。江ノ島、紀の国屋の手作りの女夫饅頭。井上蒲鉾店（かえりの江ノ電・鎌倉駅改札口からＪＲへの通路左側）の小判揚など、いかがでしょうか。

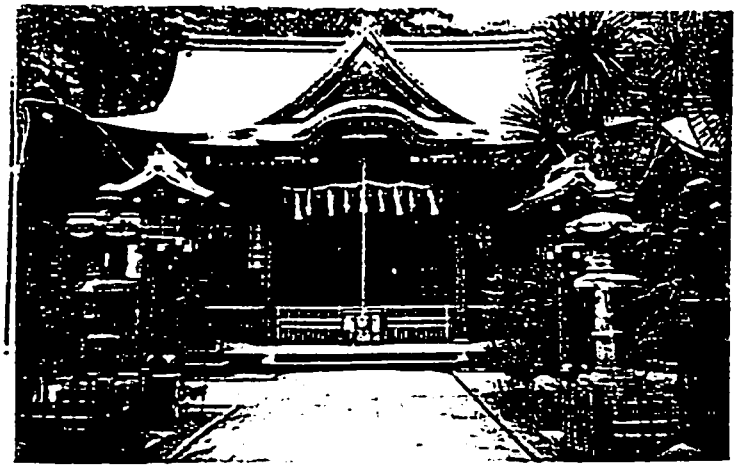
# 1 藤　　沢

## 江の島

▶藤沢市江の島2－3－8〈→地 p. *108, 109*〉
▶小田急線片瀬江ノ島駅・江ノ電江ノ島駅下車15分，湘南モノレール湘南江ノ島駅下車20分

対岸の片瀬の参道を抜けて弁天橋をわたると江の島（県史跡・名勝）である。縁起では，五つの頭をもつ竜が人々を苦しめていたが欽明天皇のころ天地がゆれ，天の暗雲の中からは天女，海中からは島が出現し，天女はその美しさにひかれて求婚する竜の望みをかなえるかわりにおとなしくさせ，これが弁才天として江の島明神になったという。1182（養和2）年，源頼朝は江の島の岩屋に文覚上人をまねいて戦勝を祈願し，ここの弁才天を勧請した。江の島明神は神仏混淆で真言宗の金亀山与願寺とも呼ばれた。その別当は鶴岡八幡宮が兼務したが，のち岩本院（岩本坊，中之坊）が岩屋本宮，上之坊が上之宮，下之坊が下之宮を管轄し，三宮とも弁才天を本尊とした。1216（建保4）年には，江の島が隆起して片瀬と陸つづきとなったこともあった。中世には霊地として雨乞いなどの祈願がなされた。「太平記」には，北条時政が江の島に参籠して子孫繁栄を祈願したところ，美女に姿をかえた竜神が現われ願いをかなえると約束したとある。そのとき竜神が残した鱗が北条氏の家紋「三鱗」の由来だという。こうした説話が伝えられるところにも，江の島信仰のひろがりを知ることができる。

室町時代の江の島は幕府直轄地の御料所となり，幕府の地方機関である鎌倉府の保護を受けていた。1450（宝徳2）年には，鎌倉府の主導権をめぐって関東管領山内上杉氏と対立した鎌倉公方足利成氏が江の島に逃げこみ，江の島合戦が行なわれた。その後，成氏は下総古河に退去して古河公方を名のったが，江の島との関係は続いている。16世紀にはいると，後北条氏が江の島を勢力下におさめ，古河公方も1554（天文23）年に後北条氏に敗れ，1582（天正10）年には足利義氏が死去して絶えてしまう。戦国時代の江の島について

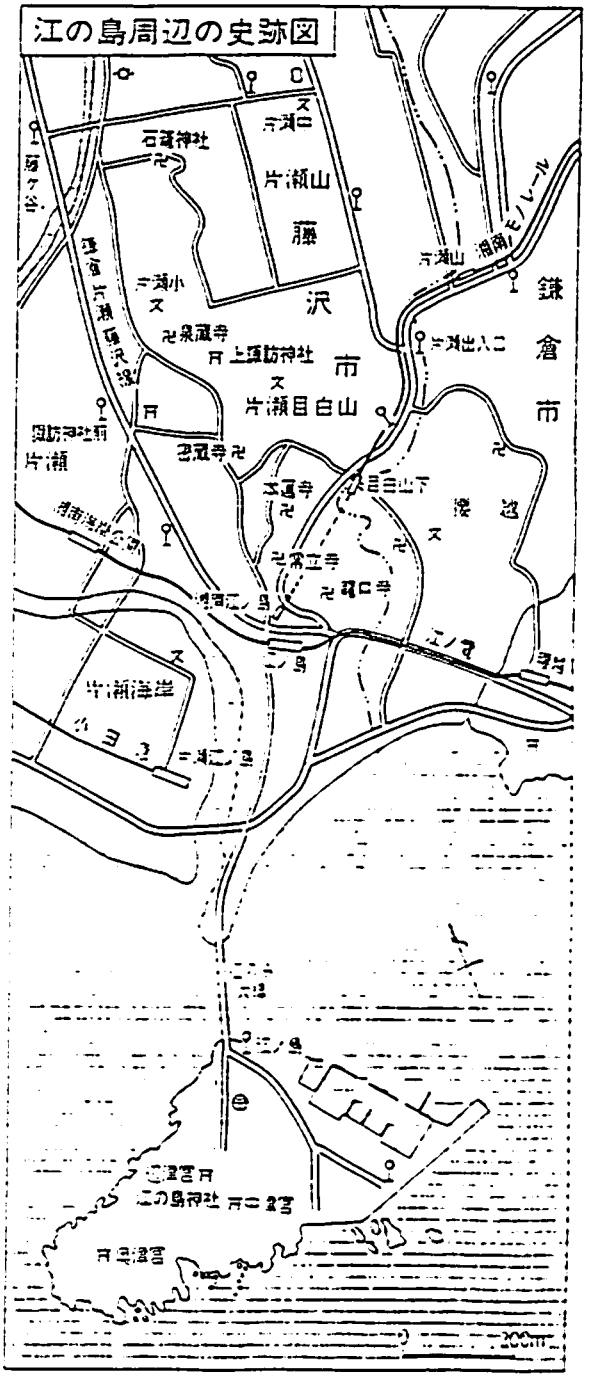


江の島神社中津宮

は，後北条氏の直轄地なのか，それともいずれの領主にも属さない公界所なのかをめぐって現在見解が分かれている。

近世では徳川幕府が本山末寺制度をしいて寺社を統制したので，三宮の別当寺である岩本院・上之坊・下之坊の間で本山の地位をめぐる紛争が17世紀を通じて繰り返されたが，けっきょく，岩本院がその地位を確立した。この本末紛争の背景には，江戸庶民などがさかんに江の島を参詣するようになり，その観光収入が大きなものとなったことがある。とくに，1689（元禄2）年にはじまったと考えられる弁才天の開帳は，巳と亥の年，つまり6年ごとに行なわれるならわしとなり，莫大な収入を江の島にもたらした。

明治にはいると，神仏分離で宗像三女神を祀る辺津宮・中津宮・奥津宮と，岩屋からなる江の島神社にあらためられ，以後，今日にいたるまで観光地として発展してきた。



サラスヴァティー　Sarasvatī　ブラフマー神の妻。学問、智慧、弁説、音楽の女神。語源的にはサラス saras(水)にヴァティー(vatī、所有をあらわすヴァット vat の女性形)を加えたもので、「水をもつもの」「優美なもの」の意味であり、『リグ・ヴェーダ』においては河の名であった。『リグ・ヴェーダ』に記される二五の河の中でサラスヴァティーは最もよく知られたものであり、「最高の母、河の中の最上者、女神中の最上の女神」(二・四一)ともいわれる。河の女神としてのサラスヴァティーは作物を実らせて富をもたらし、水の浄化作用が重視されて川岸で行なわれる祭式の保護者として崇拝されるようになった。ブラーフマナ文献ではヴァーチュ vāc(言葉)と同一視され、後世には学問、智慧、弁説、音楽をはじめとする芸術の女神とされるようになった。サンスクリット語とそれを書きあらわすデーヴァナーガリー文字の作者ともいわれる。ブラーナ文献では、ブラフマー神の三人の妻、サラスヴァティーとサーヴィトリーとガーヤトリーについて記しているが、『マツヤ・プラーナ』では、これらの三人は同一人物であるとしている。

サラスヴァティー女神

ブラフマーは自分自身の光輝から一人の女性をつくり出した。この女性がシャタルーパー、サーヴィトリー、ガーヤトリー、ブラーフマニーなどという名で知られるようになった。ブラフマーは自分がつくり出したこの素晴しい娘を見て夢中になった。それに気づいたサラスヴァティーが父親のまなざしを避けるために右の方に遠ざかると、ブラフマーの体からもう一つの顔が現われ、彼女が左の方に回り、父の背後に隠れると、さらに二つの顔が現われ、彼女が空中に飛び上がると第五の顔が現われた。もはや逃れられないと分り、彼女はブラフマーと結婚した。彼らは仲むつまじく一〇〇年を過し、人類の祖となったマヌを産んだ。マヌはスヴァヤムブヴァともヴィラートとも呼ばれた。

仏教では大弁天、弁才天、妙音天、美音天、弁天、大弁才功徳天と訳され、音楽(おんがく)、弁才、財福、智慧の徳がある天女形で吉祥天とともに信仰されている。密教では胎蔵界曼荼羅外金剛部院に琵琶をひく図がある。

◎江ノ島

凝灰質砂岩からなる陸けい島。つまり、もと片瀬丘陵が竜口寺の高地へと続く岬の南端であったものが、第三紀（6000～10万年前）中頃から、第四紀沖積世（1万年前）初めごろまでに沈下－隆起－侵食という地質学上の変化をくり返しているうちに、陸地から切り離され、孤島化してしまった。

周囲およそ3キロ、面積5分の1平方キロ。高さ60・4メートルで、ちょうど直角三角形の形をなし、そのうち三分の一あたりがくびれて、山二つとよばれる形になっている。

いくつもの海侵洞窟、奇岩、岩嘴がその裾をめぐり、島の頂上からは、前面に伊豆大島、左手に三浦、房総半島、右手に天城、箱根の連山、孤峯富士の眺望をほしいままにしている。

江ノ島三社祭祀の歴史は古いが、東海の名蹟として広く国内にその名をしられるようになったのは、源頼朝が養和2（1182）年に、祈願、参詣した以来のことであろう。

◎八臂弁財天座像

八臂の姿で、服は宋風、顔容は藤原期をしのばせるものがある。

複雑な衣紋の線をよくまとめあげているところは、鎌倉期彫刻の最盛期の写実性の結晶。

◎群狼奉賽像の庚申塔

中津宮から奥津宮にいたる間の山二つ近く、参道脇にある。尖塔角柱型の花崗岩製で総高143㎝、塔身高86㎝、幅43㎝。

4面一杯に計36匹の群狼がそれぞれ異なった姿態で神徳に奉賽しているという構図である。

造立の年時は記されていないが、江戸時代後期ごろ、江戸の粋な信者によって寄進造立されたと思われる。

◎福石

杉山検校が社殿に参籠し、その願の日の帰途に、この石につまづいてころんだとき、竹筒に入った松葉が身体をさした。これにヒントをえて管鍼の妙術を考案したといわれ、時の将軍、綱吉の持病をなおし、その功によって総検校を許された。

◎稚児ヶ淵

鎌倉相承院の稚児白菊は建長寺二徳院の自休蔵主との恋を信仰と報恩の故にふり切り、ある夜、ひそかに江ノ島に渡り、この淵から投身した。

あとを追ってきた自休は松の枝にかけられた白菊の衣をみて、ここに後追い心中した。

白菊の辞世　白菊としのぶの里と人間はば思い入り江ノ島と答えよ

自休の辞世　白菊の花の情けのふかき海にともに入り江ノ島ぞうれしき

**日蓮上人法難図**　小林柄音筆　いわゆる竜ノ口法難。佐渡護送の途次、ひそかに斬られようとした日蓮は、うちおろす刀が雷光にあって砕け、危うく、命を全うしたという。

（写真図説 宗教日本史 より）

日蓮

（右）画像（「説法の御影」）　法華を持ち精悍な顔つきで男女二人に法を説く。聴聞の男女にはそれぞれ授与法名法蓮、授与法名蓮華比丘尼の要書が見られる。重文　静岡妙法蓮寺

日本史百科全書より

**日　蓮**　日蓮宗（法華宗）をひらいた日蓮（一二二二～八二）は、承久の乱の翌年、一二二二年（承久四）に九十九里浜の南、安房国東条郷の海辺で生まれた。父母の名も、出生の月日も伝わっていない。後年、みずから「せんだらが子」「賤民が子」と記していることから、寺院にむすびついた宗教的隷属民の出身であろうともいわれている。「せんだら」とは、インドのカースト制度で最下位の賤民階級スードラのことである。

日蓮の幼少時代については、あまりよくわからないが、一二三三年（天福元）十二歳で東条郷にある天台宗清澄寺の道善坊に少童として入り、十六歳で僧となって是聖坊蓮長と名のった。少年時代の日蓮は、日本一の智者になりたいと一心に虚空菩薩に願い、しばしばこの菩薩の姿をみたという。日蓮は十七歳から天台教学を学び、あわせて密教を修め、さらに鎌倉に赴いて悪心流の天台教学を深めて、また念仏と禅を研究した。

**比叡山の日蓮**　一二四二年（仁治三）日蓮は二十一歳で一戒体即身成仏義」を著わし、この年はじめて都に出て比叡山にのぼった。日蓮は、このの十年間、比叡山で天台教学を学ぶかたわら、京都、奈良の諸寺をめぐり、浄土教からも大きな影響をうけた。

日蓮は、法華信仰の新展開によって天台宗を復興しようと志した。天台宗は古代末期以来の念仏の流行によって大きな打撃をうけていた。念仏者が一神教的な阿弥陀仏の信仰を軸として専修念仏を唱えて民衆の心をとらえ、顕密諸宗への果敢な批判を展開すると、比叡山は専修念仏の徒への弾圧に力を注いだ。天台宗では、封建社会の成立に対応する新しい教学として信仰中心主義の天台本覚思想の教学がさかんで、日蓮も比叡山で、もっぱら悪心流を学んだ。

**法華経唯一の信仰**　悪心流は、浄土宗の法然流に大きな影響を与え、その教学形成の源流となったが、同時に、悪心、顕教二流が支配的となった天台宗にたいのうちにも、その影響は念仏全盛の時代に対応する浄土教の教学と行法への妥協となって返ってきていた。天台宗がこの方向に進むかぎり、新しい時代に対応する独自の地歩は、ますます狭まる他はなかった。日蓮は、天台宗の復興のために、阿弥陀仏信仰に対抗できる教済の教義として法華経唯一の信仰をとうえた。

法華経の信仰は、古来以来この経の功徳を民衆の生活にもちこんだ民間の法華者の活動によって広く根をおろしており、日蓮が指向した新しい宗教運動には、既成の地盤が存在していた。天台の挑戦であり、法華経の行者としての道を歩んだ日蓮が、法華経を奉じて念仏の排撃に進んだのは、旧仏教の体質改善という時代の要求にこたえるものであったといえよう。

**念仏排撃**　日蓮は十年の京都遊学ののち、一二五三年（建長三）三十二歳で故郷に帰った。日蓮は、清澄山上の堂の前で朝陽に向かって「南無妙法蓮華経」の題目を十唱え、立教開宗を宣言したと伝えられる。

**「立正安国論」**　翌年、日蓮は「立正安国論」を書き、修行を説いて法華信仰に立つ政治を実現しようとして、執権北条時頼の側近に提出した。立正安国とは、正法を立てることによって、国土の安穏がもたらされるという思想であり、古代仏教の三法仏法相即の思想を否定して、仏教を根幹として北二（現実の社会）をそのまま仏国土（理想の世界）にするという変革の主張であった。

日蓮とその弟子たちには、鎌倉幕府にたいするかなり大きな期待があり、念仏側との公けの場での対決を期待していたが、この上書は、全然相手にされなかった。かえって日蓮の念仏攻撃は念仏信者の怒りを買い、草庵は焼打ちにあった。日蓮は難をのがれて、年来の保護者である下総の武士富木氏のもとに身を寄せたが、翌年ふたたび鎌倉に現われた。

**他国侵逼難**　日蓮は取り締りの網にかかって伊豆に流された。日蓮は二年あまりを伊豆で過ごしたが、一二六四年（文永元）故郷にもどって、布教のかたわら東条郷の地頭との紛争の渦中に身を投じた。日蓮は清澄寺と結んで東条氏と争ったが、地頭側の攻撃に敗れて、重傷を負った。

三年後、四十六歳の日蓮はまたも鎌倉に現われた。草庵をむすび、弟子に法華経を講ずる静かな生活がはじまったが、一二六八年（文永五）モンゴルの国書が到着して、幕府が衝撃をうけると、日蓮は多年の忍苦の境涯から起ちあがった。かつて「立正安国論」で正法を採用しない権力者に警告した自界叛逆難（内乱）が実証されたのにつづいて、他国侵逼難（他国が攻めてくる難）の予言が、今や的中したというのである。日蓮は、「安国論御勘由来」を幕府に提出し、予言の的中を根拠に、念仏、禅を退けて、国師として国難の対策を知る自己を用いるようにうったえた。その反応がないとみるや、日蓮は、官辺をはじめ建長寺、極楽寺、寿福寺等、鎌倉の念仏、禅、律の諸寺に手紙をおくって宗論を挑む戦術に出た。

**四箇格言**　日蓮は、みずから末法の世に法華経の理想を実現する聖人であることを自認して、強い使命感に燃えていた。日蓮の見解によれば、モンゴルが、法華経をもちいなかった宋を滅ぼし、同様に正法を顧みない日本に迫ってきたことは、まさに仏罰なのであった。

日蓮は、文永の役前夜の鎌倉で、二年余にわたって法華信仰を説き、執拗に当局者にたいして自説をとりやまなかった。この時期から日蓮は、念仏の排撃に加えて禅、律、真言をも、きびしく非難するようになり、「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」の四箇格言を唱えた。日蓮の思想には、漁民、下級武士などの帰依者がしだいにふえてきた。日蓮の小集団は、政治権力と他宗への攻撃をつうじて、侮りがたい勢力に成長しつつあった。

**佐渡配流**　一二七一年（文永八）には他宗との衝突がますます激化し、強圧の機をねらっていた幕府は、上書を理由に日蓮を捕え、即日佐渡への流刑を言い渡した。

一二七四年（文永一一）五十三歳の日蓮は赦免となり、鎌倉へもどった。健康も衰え、政治の中心地で活動をつづける意欲もうすれた日蓮は、信者波木井実長の所領甲斐国身延山に隠棲した。身延山は山岳信仰の霊場七面山につづくけわしい深山で、みずからを上行菩薩と自覚する日蓮は、ここを駅逓が法華経を説いたとされるインドの霊鷲山になぞらえた。

同年、文永の役が起こり、強大なモンゴル軍は暴風雨に会って退いた。

一二八一年（弘安四）弘安の役が起こったが、またも暴風雨に会って、モンゴル軍は退いた。身延山内の講堂もようやく整備され、身延山久遠寺は成ったが、二度のモンゴル軍の来攻も、ついに日本を正法の国に変える契機とはならなかった。

日蓮は、翌年、病気を癒すために身延を下って、常陸国に湯治に赴き、ついで故郷を訪れようとして、武蔵国の池上宗仲の宅（のち長栄山本行寺）まできたが、病勢が悪化して、この地で六十一年の生涯を終った。

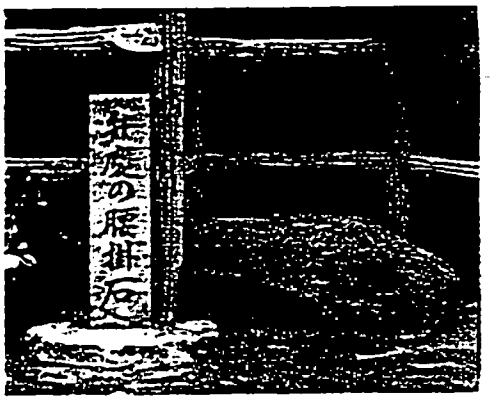
**日蓮の教義**　日蓮は、その生涯を法華経の弘通にささげ、不惜身命のたたかいを実践した。その教義では、法華経を絶対の真理とし、題目を真理そのものであり、受持唱題することこそ、その宗教はもとより、法華経以外のいっさいの宗教的権威を認めなかった。

あなたは、どちらがお好きですか？

## 満福寺

▶鎌倉市腰越2－4－8 〈→地 p.98〉
▶横須賀線鎌倉駅江ノ電藤沢行腰越駅下車2分

江ノ電を降り，広い通りに出て左折し，少し行ってまた左折し小道に入り，江ノ電の線路を横切ると満福寺（真言宗）がある。山号を龍護山といい，開山は行基と伝えるが定かでない。中興開山は1173（承安3）年に没した高範といわれる。1185（元暦2）年，平家を滅亡させた源義経が鎌倉入りを止められ，ここに滞在し，大江広元を通じて頼朝に「腰越状」を送った話は名高い。山門を入ると本堂があり，願めば寺宝は拝観できる。本尊は薬師三尊で，弁慶筆といわれる「腰越状」の下書きがあるが当時のものとは思えない。他に江戸時代の「腰越状」の版木，弁慶所用と伝える椀・錫杖などもある。境内には弁慶の腰掛石とか，弁慶が墨の水を汲んだという硯池などの伝説も残されている。



満福寺弁慶の腰掛石

神奈川県の一〇〇寺（けい）より

当時、腰越は鎌倉の西の関門として宿駅が設けられていた。いわば江戸における品川宿のような存在だった。ここで空しく日を過ごして十日後に義経は公文所別当の大江広元あてに一通の書状を送り、頼朝に愁訴に及んだ。この書状を世に「腰越状」という。

「恐れながら申し上げる趣旨は、かたじけなくも鎌倉どのの御代官の一人に選ばれ、後白河法皇の御使として朝敵を平らげ、父祖代々の敗戦の恥を雪ぎました。当然恩賞の沙汰が行なわれるべきところ、意外にも佞人の讒言によって莫大な勲功を黙殺され、過ちもないのに咎めを受け、むなしく血涙にむせんでおります……」

といった書き出しの長文の手紙は、義経の二心ない真情を切々と訴えた格調の高い文章である。

この腰越状をもってしても頼朝の怒りは溶けずやむなく義経は京へ引き返す。そして幕府の追及を受け、奥州平泉に落ちのびた末、文治五年（一一八九）藤原泰衡の軍勢に囲まれ、三十一歳で波乱の生涯を閉じるのである。

鎌倉名所図会より

都を発った九郎の働きは目覚ましいものがあった。大しけにもまれて四国に渡り、背後から屋島の平家を衝き、更に息もつかせず壇の浦の決戦に持ちこんだ。頼朝が半年かかってなし得なかったことを、九郎はたった一月のうちにやってしまったのだ。

九郎の名は日増しに高くなった。この戦功によって、彼の無断任官の軽挙も赦されるのではないかという噂がまわりでも囁かれ始めていた。

が、頼朝は、至極当然のように職さの報をうけただけだった。彼は九郎の無断任官を怒らなかった代り、今度の戦功もさして喜んでいる風は見せず、謝の様な静かな態度を変えなかった。これはその後、九郎が軍監の梶原景時と衝突ばかりしているとか、戦勝に驕って専横な振舞いが多いという噂が流れて来たときも全く同様だった。

——お変りになられたな、兄上は……

傍にあって全成は時折その顔色を窺ってみる。人よりも嫉妬や猜疑の激しい筈の兄が、こうして静かさを保っていることが、むしろ彼には薄気味悪く思われた。

平家追討が一段落すると、頼朝は頼朝に暫く鎌倉に止まって平家の旧領を沙汰することを命じ、九郎には、捕虜になった平宗盛以下を連れて下向するようにと伝えて来た。

そして、九郎が鎌倉を発つと間もなく——突如頼朝は、無断任官した御家人たちに、ひどく激越な叱責の下文を下したのである！

この時までに、院は平家追討の行賞として、二十数名の御家人を兵衛尉や判官に任命していた。頼朝は、自分の許しを得ないでこれに応じた御家人一人一人の名をあげ、激しい罵言をあびせ、本国に帰らずに院に仕えるがいいと言い、更に尾張の墨股川以東に足を踏み入れれば本領を召しあげ、斬罪に処するとまで言い切ったのである。が、この時もその中に九郎の名は混っていなかった。もし、これらを罪人とするなら、九郎とて同罪である。いや、九郎の無断任官こそ、秩序を破る甚だしいものではなかったか……

兄は九郎をどうしようというのか？　全成は九郎に対する決定をなぜか避けているようにみえる兄の動きを、じっと見ていなくてはならない、と思った。胸のうちでは既に九郎への嫉妬も憎悪も消えていた。いや、そうしたものを既に超えた、何か摑みどころのない兄と九郎のからみあいを、息をつめて見ていることが、唯一つ、自分の生きる道である上な気さえしていたのである。

九郎は尾張墨股川を越えた。頼朝は彼を制止はしなかった。そしてやがて彼は、足柄を越えた。それでも頼朝は黙っていた。

鎌倉では漸く不審の声が湧まって来た。

——どうするのだ、九郎殿は……

——御舎弟とて、無断任官の事実は事実。それを御所は見過されるのか？

先に無断任官を糾責された人々の中には、有力な御家人の子弟も混っていたから、その視達の間で、まず、こうした遺見がくすぶりだした。

——いくら捕虜護送の大任があるとはいえ、鎌倉殿の掟を破った人に鎌倉の地を踏ませてよいものか。

——それでは鎌倉殿の命令の権威のほどが疑われようが……

声は九郎が酒匂の駅につき、明日は鎌倉入りをするという時に到って最高潮に達した。

その日の昼下り——全成は海辺近い自分の屋敷から御所への出仕の途次にあった。ふと異様な気配に目をあげたとき、御所の方から砂埃をあげて西へ向って行く騎馬の一団を彼は見たのである。ひどく慌しげに額をくれているその中には、日頃頼朝に近侍している小山朝光の顔もあった。若い朝光は緊張した面持で前方を見据え、すれちがった全成にも気づかない様子だった。その黒い旋風が、五月の陽光の下でみるみる小さくなって行くのを見送った全成は、御所まで行きつかないうちに、それが九郎の鎌倉入りをさしとめる使いだということを知った。無断任官した九郎は鎌倉殿へ目通りは許されず、捕虜受取りには、改めて北条時政が差しむけられるのだという。

——うむ、む……腕を組んだまま振りかえったが、黒い旋風は、すでに余塵さえも残してはいない。砂まじりの若宮大路を相変らず太陽が灼き、涼げな翼女が二人三人、裾をひねりながら、ゆらゆら歩いて行く——いつに変らぬ鎌倉の街だけがそこにあった。

が、全成は弦から放れた矢のゆくえを追うように、じっと朝光たちの行った方向をみつめていた。そしてやがて、ひょいと向きをかえると、御所には出仕せず、そのまま家に戻ってしまった。

それから半月ばかりの間、全成は病気をいいたてて門を閉じ、妻の侯子にも言い含めて誰にも会おうとしなかった。が、朝光の口上を聞いた九郎の驚愕、腰越からの歎状の捧呈、頼朝の拒否、九郎の失望、帰洛……これらは嫌でも彼の耳に入って来た。それだけではない、兄への取りなしを頼もうと九郎の使がひそかに会いに来たことさえあったのだが、彼はとうとう病気を理由に門をあけなかった。

「御所に会わせてくれ。会えばわかる。きっとわかって頂けるんだ！」

地団太踏んで九郎はそう言ったという。そして遂に頼朝が赦さないと知ると、よし、それならそれで俺にも考えがある、鎌倉に不満を持つ輩はついて来い、と広言して京へ引揚げたということだった。最後まで兄を信じていた九郎が、それだけ絶望も深く、激情は抑えかねたであろうことが、全成にはよくわかった。

が、すべてはもう遅ってしまったのだ……

全成はある夜ふと、浜へ出て見る気になった。嵐でも近いのか珍しく漁火ひとつ見えない海に、潮鳴りだけが高かった。久しぶりの海の風が、しめりを帯びて全成を取巻き、足下の砂は濡れて重かった。

彼は、数年前、足の下の砂を蹴り蹴り無邪気に喋っていた九郎を思い出していた。その九郎は、今は鎌倉の砂を踏めない遠くにあった。そしてまた、兄の頼朝も、全成とは既に遠く離れた存在になっていた……

——治承の冬、兄上の所に来たとき、俺は今の姿を想像したろうか……

かすかな波あかりに向って、黒衣の腕を組んだまま、全成はそこに立ちつくしていた。

——二十八の俺はもっと野心に燃えていた筈だった。なのに、今の俺は、兄と九郎の間に立って、殻に閉じこもることによって、わずかに自分を支えているだけではないか……

生虜になった宗盛を送って来た九郎の鎌倉入りを拒んだことから、頼朝の九郎への敵意は俄かに表面化した。彼は九郎が都へ帰ったのを追いかけて、領知を許していた平家没官領二十四か所も取上げてしまった。これは景時が恩賞として多くの領地を賜り、かつ、播磨、美作、備中、備前、備後の警固を命ぜられたのとまさしく対照的だった。

——執念ぶかい奴だな、平三は。とうとう九郎殿を追出しおった。

——それにしても、なぜ御所は平三の言うことをそれほど信用されるのか……

義経と入れかわりに鎌倉に戻って来た景時は、人々が畏怖と警戒の混った眼差しで自分を見るのに気がついた。

が、景時は誰にも弁解はしなかった。鎌倉に入れられないと知った義経が、ひどく憤慨し、それならもう頭は下げぬ、鎌倉に不満のある奴等はついて来いと口走って京へ戻ったという話を聞いた時も、ただ、そうか、と一言いって薄く嗤っただけだった。

いまや景時は一介の大庭の支族、鎌倉近辺の小領主ではなく、京都以西の要地の検断にあたる実力者である。しかも人々が彼に畏怖を感じるのは、武力よりもさらに強大な力を持つからである。

——強引に御所を動かせる男……

人々はそう思っている。この点では三浦、小山、千葉などの豪族さえ及びもつかない。しかも頼朝さえそれを裏書きするように、人前で時折彼に気をかねたような素振りを見せるのである。

景時はそれが必ずしも頼朝の真実でないことを知っていた。めったに本心を見せない頼朝は、誰かに動かされてという形をとりたがる。批難をうける恐れのあるときは特にそうだ。が、景時はそれと知りつつ進んで頼朝の意向を代弁する役を引受けた。それによって頼朝の東国の王者としての位置が強まるのなら何のためらいが要ろう……それがひいては武家社会を押しすすめるのだという信念が益々彼を激昂にした。彼が執拗に九郎追討を主張したのもこのためである。

## 真白き富士の嶺（七里が浜の哀歌）〔△明治四十三年〕

三角錫子

一　真白き富士の嶺　緑の江の島　仰ぎ見るも　今は涙
　帰らぬ十二の　雄々しきみたまに　捧げまつる　胸と心

二　ボートは沈みぬ　千尋の海原　風も浪も　小さき腕に
　力もつきはて　呼ぶ名は父母　恨は深し　七里が浜辺

三　み雪は叫びぬ　風さえ騒ぎて　月も星も　影をひそめ
　みたまよ何処に　迷いておわすか　帰れ早く　母の胸に

四　みそらにかがやく　朝日のみ光り　暗にしずむ　親の心
　黄金も宝も　何しに集めん　神よ早く　我も召せよ

五　裏間に昇りし　昨日の月影　今は見えぬ　人の姿
　悲しさ餘りて　寝られぬ枕に　響く波の　おとも高し

六　帰らぬ浪路に　友よぶ千鳥に　我もこいし　失せし人よ
　尽きせぬ恨に　泣くは共々　今日もあすも　斯くてとわに

明治四十三年二月発表

明治四十三年一月二十三日午後、鎌倉と江の島の中間の七里が浜の沖で逗子開成中学校所有のボートが沈没し、乗組の少年十二名が全員溺死した。少年たちは逗子小学校児童（十一歳）が一人、中学二年生が三人、中学四年生が二人、中学五年生が五人で、最年長者は五年生の一人（二十三歳）であった。逗子開成中学校長は報を聞いてすぐ救助に向かい、横須賀警察署からは署長以下二十名が現場に急行し、漁船二十二隻（漁夫二〇〇名）が出て捜索に当たり、横須賀軍港からは駆逐艦二隻が力を添えた。遺体は一月二十七日午後五時までに全部発見されたが、二月七日逗子開成中学校庭で大法要が行なわれ、その時この哀悼歌が鎌倉女学校の最上級生（四年生）全員に依って歌われた。この歌は鎌倉女学校教諭三角錫子が作り、三角女史は逗子に住んでこの救助作業を目撃し、遭難者の数名を前から知っていた。

この曲はアメリカの Garden の作曲、When we Arrive Home という歌で、これは「明治唱歌」第五巻に『夢の外』という大和田建樹氏の作詞で出ている「昔のわが宿変わらぬふるさと、夢の外に今日であえる」と歌い出す歌で、たとえば『夢の外』に「うれしさ餘りて寝られぬ枕に」と歌う同じ節に『真白き……』のほうでは「悲しさ餘りて寝られぬ枕に」と付けてある。この歌は早く学生間に歌い伝えられたので、大正五年六月「七里が浜の哀歌」という単行本となって楽譜が発行され、雑誌「月刊楽譜」にもこの歌詞が『哀悼の歌』と題して載せられ、大正七年ごろからは演歌となって巷間に流布したが歌詞も少し変えられ、曲は長調のものが短調に替わってしまった。

定本日本の唱歌より

↑ 稲村ガ崎の太刀投　黒住章堂筆　文部省唱歌の「七里ガ浜の磯づたい稲村ガ崎名将の剣投ぜし古戦場」と唱われた有名な一場面である。新田義貞が太刀を投ずるとたちまち潮がひき、海岸づたいに鎌倉に攻め入ることができたという。



[illegible]日本史より

**新田義貞**　にったよしさだ　（1301―38）鎌倉末期から南北朝初期にかけての武将。新田氏の嫡流で、朝氏の子。小太郎と称した。元弘の変では、はじめ北条側の武将として千早城の楠木正成を攻撃したが、やがて幕府を見限って本国の上野国（群馬県）に帰り、討幕の旗上げをして鎌倉を攻め、北条一族を滅ぼした。その功によって、建武中興政府から越後守に任ぜられ、上野介および播磨介を兼ね、次いで左近衛中将となり、武者所頭人の地位についた。しかし、六波羅探題を滅ぼして建武新政権の樹立に第一の功臣と称された同族の足利尊氏としだいに対立するようになり、一三三五年（建武二）尊氏が中先代の乱平定後、建武新政府に反旗をひるがえすと、尊氏追討のため東下したが、箱根・竹の下に破って大敗した。勝ちに乗じて京都にはいった尊氏も、北畠顕家らに敗れて九州に落ちたが、すぐに陣容を立て直し東上、ふたたび京都を奪おうとした。義貞は、楠木正成らとこれを摂津湊川（神戸市内）に防ごうとしたが敗れ、皇太子恒良親王を奉じて北陸地方に下り、金ヶ崎城（敦賀市）を根拠としてこの地方の経営にあたろうとした。しかし、足利方の斯波高経らに囲まれて城は孤立し、義貞は城を脱出して挽回をくわだてたが、成功しないうちに一三三七年（建武四・延元二）落城して恒良親王は捕えられ、義貞の長子義顕は自殺した。義貞は再挙をはかり、翌年一時、勢力を挽回したが、閏七月越前藤島（福井市）の戦いで流れ矢にあたり自殺した。藤島神社に祭られている。（新田英治）

花　押

大日本百科辞典　より

## 稲村ヶ崎のあたり

▶鎌倉市稲村ヶ崎〈→地 p. 87〉
▶横須賀線鎌倉駅江ノ電稲村ヶ崎駅下車10分

十一人塚からさらに南へすすめば七里ヶ浜の海岸に出る。国道134号線を東に少し行くと古戦場で名高い稲村ヶ崎（国史跡）がある。稲村ヶ崎は霊仙山の丘陵が海中に突き出た岬の部分で，高さは60 m ある。稲村ヶ崎の名の由来は，この岬を遠くからながめると刈り取った稲を積み上げた稲群に似ていることからきているといわれている。稲村ヶ崎は鎌倉時代，鎌倉の西の境界の地であり，また極楽寺坂の切通しが開かれる以前にはこの地から海岸に沿って鎌倉に入ったところである。稲村ヶ崎の名がひろく知られているのは，新田義貞の鎌倉攻めのとき，義貞が竜神に祈願して海中に黄金造りの太刀を投じて海岸を徒渉したとの故事のためである。この故事は『太平記』に語りつがれていたもので，いまでも一般に親しまれている。現在稲村ヶ崎の周辺は公園に整備され，公園の入口には「史蹟稲村ヶ崎新田義貞徒渉伝説地」の石碑と明治天皇御製の歌碑が立ち並んでいる。七里ヶ浜に面した公園の西には1910（明治43）年に七里ヶ浜沖で遭難した逗子開成中学生の「ボート遭難の碑」が立っており，公園の東の丘陵の上には1907（明治40）年霊仙山の山頂にしばらく滞在していたドイツ人細菌学者コッホ博士の記念碑が立っている。

稲村ヶ崎から腰越の小動の岬までの浜を七里ヶ浜と呼ぶが，これはかつて6町を1里と数えていたことから42町あるこの浜を称したのである。

# 最後の鎌倉武士

## 稲村ヶ崎／新田軍の鎌倉突入／北條氏、東勝寺に滅ぶ

五月二十一日の夜半、全軍を背にした新田義貞は、稲村ヶ崎の巖頭に一人立ち、兜を脱いで海上遥かを伏し拝んで、龍神に祈誓を捧げた。

「義貞、今、臣たる道を尽くさんかために、斧鉞をとりて敵陣に臨む。その志、偏えに王化を賛け奉って、蒼生を安からしめんとなり。仰ぎ願わくは、龍神、臣が忠義に感じて、潮を万里の外に退け、道を三軍の陣に開かしめ給え」

至信に祈念しおわった義貞は、腰間の黄金造りの太刀を抜き、これを海中に投じた。

その夜明け頃、奇蹟が起こった。

今まで潮が干いたことのなかった稲村ヶ崎が、この日に限って潮が干いたのである。巖頭直下には、にわかに二十余町もの干潟が出現した。横矢を射んと構えていた幕府の兵船は、あれよあれよという間もなく、潮に引かれて数町のかなたに押し流された。すでにして、横矢は届き上うもなかった。

それと見た義貞は、ただちに軍扇一旋して、全軍に突撃の下知を下した。江田、大館、里見、烏山、田中、羽川、山名、桃井等々の一族はもちろん、越後、上野、武蔵、相模等々の軍勢総じて六万余騎、一斉に出撃して稲村ヶ崎の遠干潟を喊け抜け、真一文字に鎌倉の中に乱入して行った。

こうして鎌倉北條氏は滅亡し、鎌倉幕府は倒れた。ときに元弘三年五月二十二日のことであったという。

世にも有名な新田義貞、太刀投げの一幕である。のちに、小学校唱歌にもなっている。

稲村ヶ崎　名将の剣（つるぎ）投ぜし古戦場

出典は南朝びいきの癖のある『太平記』である。しかし、北朝に肩入れする傾向のある『梅松論』にも、同様のことが記されている。

「ここにふしぎなりしは、稲村崎の浪打際、石高く道細くして、軍勢の通路難儀の所に、俄に塩干て、合戦の間、干潟にて有し事、かたく仏神の加護とぞ人申しける」

それでは、この奇蹟は本当に起こったのだろうか。この点について、従来きわめて多くの学説や解釈がなされている。

全面的に肯定されたのは、坪井九馬三氏である。このあたりが大干潟になる「二時五十八分」は、『太平記』に「夜半許りに」とあるのと時間的にも一致する。だから奇蹟というのではなく、通常の干潮を誇張したに過ぎないとされたのである。

これを受けて、肯定説を補強されたのは、大森金五郎氏である。みずから実験的に浅瀬を渡渉して、通過可能を証明されたのである。

これに対して、全面的に否定されたのは、「太平記は史学に益なし」という論文で有名な久米邦武氏である。潮汐干満の差が、数万の大軍の通行を可能ならしめるほどに大きかったはずはない。神懸りであるとされたのである。

肯定・否定の両極端の中間にあるのが、三上参次氏の士気鼓舞説である。干潮になる時刻を察知した名将新田義貞が、将兵の士気を鼓舞するために一場の芝居を演じたというのである。

この説は、義貞麾下の多くが、上野、下野など、海を知らないものであったということで支えられた。さらには、二日前の大館宗氏の鎌倉突入も、夜間の干潮を利用してのものであったが、後続する兵が少なかった上に、幕府のほうで控置していた本間軍などの予備軍を繰り出したために失敗したのだという解釈も現れた。

さらに、この説は発展して行き、大館軍の干潟渡渉による鎌倉突入ということにヒントを得て、義貞は一場の芝居を演じたのだというところまで進んで行った。

これらの一見科学的な現代的諸解釈に対して、より古文書、古文献を重んずる正統派の歴史学者高柳光寿氏は、『海道記』に、

稲村といふ所あり、さかしき岩のかさなりふせる浜をつたひ行けば、岩にあたりてさきあがる浪のはなのごとくにちりかかる。

とあることや、前記『栂松論』に、

石高く道細くして

とあることなどを勘案されて、旧東海道の稲村ヶ崎のあたりでは、

道は相当高い所を通っていたのではないかと思う。義貞は干潟を通ったのではあるまい。

という結論を出しておられる。

ちなみに、最近、千葉県房総半島の突端、白浜町の海岸は、過去十年間に二、三センチほどずつ隆起する傾向にあり、その結果、毎年数メートル幅で国有地が自然発生しているということが発表された。

現在、鎌倉の西方の江の島は、本土の片瀬海岸とほぼ陸地続きになっている。しかし、室町時代のいくつかの合戦例を見ると、当時、江の島に敗兵が逃げ込むと、本土側からは船に乗って攻撃をかけるよりほか致し方がなかったという。

つまりは、少なくとも湘南から房総半島にかけての地域では、中世末期か近世初期あたりから以降、現代にいたるまで、海岸一帯に隆起現象が続いているということになる。

現代の稲村ヶ崎は、たしかに渡渉可能かも知れない。しかし、六百年以上の昔、稲村ヶ崎の波打際は今よりもさらに狭く、さらに低かったのである。その幅は、天野、大塚などのわずかな軍勢が一、二列横隊で駆け抜けるほどはあったが、義貞麾下の六万騎という大軍が押し通れるほどはなかったに違いない。

とすると、結論は高柳氏と同じになる。やはり義貞軍は、〝相当高い所〟を通ったと考えざるを得ないのである。そして、このあたりで〝相当高い所〟というと、極楽寺坂路と稲村崎路との中間に屹立する標高八三メートルの霊山しかない。

大干潟出現を否定する久米邦武氏や岡部周三氏も、義貞軍の霊山通過説を唱えておられるが、その根拠にされたのが『続群書類従』系図部所収の「和田系図」の裏書にあった文書である。「和田系図」は、金剛寺領和泉和田荘（堺市和田）の惣下司職の和田氏の系図である。

南北朝内乱期になって、楠木正成の弟正氏は和田氏の養子になって、和田正季と改めている。それから以降、和田氏は楠木氏と同族になり、諸合戦にさいして常に楠木氏と行動をともにしている。しかし、これよりさき、鎌倉時代の和田氏は、鎌倉御家人であった。一族の中から、幕命に従って千早城に籠る楠木正成を攻めたものさえあったのである。

ところで、その「和田系図裏書」の中には、「三木村惣領俊連軍忠状」ともいうべきものがあり、中に容易ならぬことが記されていたのである。

五月二一日（元弘三年）、敵霊山寺の大門に引き籠り、大手（稲村崎）の軍勢を散々に射るの間、打入り殺きの処、俊連疵より折下って先懸し、まず敵の籠る大門を打破り、数箇疵を被るといえども、身命を捨てて戦うの間、朝敵を追落しおわんぬ。また、俊連霊山寺の疵に責め上り、夜間に及びて戦うの処、また若党奥富兵衛三郎俊家（石塔の上、疵を被る）疵を被る。

やはり、幕府軍が霊山の峰から散々に矢を射下ろしたので、新田軍は稲村崎路を駆け抜けることができなかったのである。

そして、戦機を決したのは、遠く和泉国（大阪府）からわざわざ駆け下ってきた三木俊連らが、二十一日の夜、霊山の峰を踏み越えたことだったのである。

# 今日、まわるところの関連年表

| | | |
|---|---|---|
| １１５６ | 保元１ | 保元の乱 |
| １１５９ | 平治１ | 平治の乱 |
| １１６７ | 仁安２ | 平清盛、太政大臣となる |
| １１８０ | 治承４ | 以仁王の乱。頼朝挙兵 |
| １１８２ | 養和２ | 頼朝、戦勝を江ノ島にて祈願　石鳥居寄進 |
| １１８４ | 寿永３ | 頼朝、大河土御厨を伊勢神宮に寄進。一の谷で平家敗る |
| １１８５ | 文治１ | 平家一門滅ぶ。義経腰越状 |
| １１８９ | 文治５ | 義経没 |
| １１９４ | 建久５ | 久伊豆宮神人、喧嘩 |
| １１９９ | 正治１ | 頼朝没 |
| １２２２ | 貞応１ | 日蓮生まる |
| １２２５ | 嘉禄１ | 政子没 |
| １２４２ | 仁治３ | 日蓮、比叡山へ |
| １２４５ | 寛元３ | 慈光寺銅鐘 |
| １２４７ | 寛元５ | 行田市聖徳太子像。時頼、三浦泰村・光村を滅ぼす |
| １２４９ | 建長１ | 越谷市建長板碑 |
| １２５２ | 建長４ | 鎌倉大仏 |
| １２７１ | 文永８ | 日蓮、龍ノ口で処刑中断 |
| １２７４ | 文永１１ | 文永の役 |
| １２８１ | 弘安４ | 弘安の役 |
| １２８２ | 弘安５ | 日蓮没 |
| １３０１ | 正安２ | 新田義貞生まる |
| １３３１ | 元弘１ | 楠正成、河内赤坂に挙兵 |
| １３３３ | 元弘３ | 新田義貞、鎌倉攻め。鎌倉幕府ほろぶ |
| １３３７ | 延元２ | 龍口寺起こる |
| １３３８ | 暦応１ | 新田義貞没 |
| １９１０ | 明治４３ | 逗子開成中ボート遭難 |

二〇、鎌倉

一、七里が濱のいそ傳ひ、
稻村崎、名將の
劍投ぜし古戰場。

二、極樂寺坂越え行けば、
長谷觀音の堂近く、
露坐の大佛おはします。

三、由比の濱邊を右に見て、
雪の下道通行けば、
八幡宮の鄕社。

四、上るや石のきざはしの
左に高き大いてふ、
同はばや、遠き世世の跡。

五、若宮堂の舞の袖、
しづのをだまきくりかへし
かへしし人をしのびつつ。

六、鎌倉宮にまうでては、
盡きせぬ親王のみうらみに、
悲慟の涙わきぬべし。

七、歷史は長し七百年、
興亡すべてゆめに似て、
英雄墓はこけむしぬ。

八、建長・圓覺古寺の
山門高き松風に、
昔の音やこもるらん。

（昭和七年三月六日訂正　明治小学唱歌）

## 東海道

一
汽笛一聲新橋を
はや我汽車は離れたり
愛宕の山に入りのこる
月を旅路の友として
右は高輪泉岳寺
四十七士の墓どころ

二
雪は消えても消えのこる
名は千載の後までも
窓より近く品川の
蒲場も見えて波白く
海のあなたにうすがすむ
山は上總か房州か

三
梅に名をえし大森を
すぐれば早も川崎の
大師河原は程ちかし
急げや電氣の道すぐに
鶴見神奈川あとにして
ゆけば横濱ステーション
港を見れば百舟の
煙は空をこがすまで
横須賀ゆきは乘換と
呼ばれておるゝ大船の

四
つぎは鎌倉鶴が岡
源氏の古跡や尋ね見ん
八幡宮の石段に
立てる一木の大銀杏
別當公曉のかくれしと
歷史にあるは此蔭よ

五
こゝに開きし頼朝が
幕府のあとは何かたぞ
松風さむく日は暮れて
こたへぬ石碑は苔あをし

六
北は圓覺建長寺
南は大佛星月夜
片瀨腰越江の島も
たゞ半日の道ぞかし

七

八

九

（大正四年鉄道唱歌）

## 参考図書


炎環　永井路子著　光風社書店　53・8刊
神奈川県の歴史散歩（下）　山川出版社　87・5刊
鎌倉名所図絵　鈴木　亨著　鷹書房　55・3刊
鎌倉ー古戦場を歩くー　奥富敬之・雅子著　新人物往来社　60・7刊
藤沢市文化財のしおり　藤沢市教委　57・3刊
藤沢市文化財ハイキングコース　藤沢市教委　57・3刊
江ノ電沿線文学散歩　金子　晋著　江ノ電沿線新聞社　60・10刊
交通公社のポケットガイド12　鎌倉　日本交通公社　60・1刊
定本日本の唱歌　堀内敬三著　実業之日本社　45・8刊
日本教科書体系近代編第25巻　唱歌　海後宗臣編　講談社　40・9刊
写真図説総合日本史　日本近代史研究会著　国文社　54・7刊
インド神話伝説辞典　菅沼　晃編　東京堂出版　60・3刊
日本宗教事典　村上重良著　講談社　53・11刊
日本大百科全書　小学館　62・9刊
大日本百科事典　小学館　45・9刊